

日本学習社会学会

Japanese Association for the Study of Learning Society

会報 No. 1 2004年12月15日

<第1回大会報告号>

目次

第1回大会を終えて.....	2
記念講演.....	3
シンポジウム.....	4
課題研究.....	5
第1回大会総会の報告.....	7
第2回大会のご案内.....	8

日本学習社会学会事務局

〒196-8540 東京都昭島市東町3-6-33

(東京都立短期大学 岩崎研究室気付)

TEL : 042-543-3001 FAX : 042-543-3002

第 1 回大会を終えて

去る9月11日(土)に、本学会初めての大会を帝京大学八王子キャンパスで開催しました。今回の大会プログラムは設立総会、公開シンポジウム、課題別研究会、懇親会からなり、参加者は114名(臨時会員を含む)となりました。参加者については、初めての大会でありましたが、北海道・青森県から九州まで日本全国にわたるなど多数の方々に参加いただきました。当日入会いただいた方や未会員の方々も少なくありませんでした。懇親会には70名を超える方々の参加を得ることができました。準備委員会を代表して心より御礼申し上げます。

さて、今大会は、本学会設立時からわずかな期間で準備を進めることになったため、参加者の方々には少なからぬご不便などをおかけしたことと思います。至らぬ点等につきましては温かいご指導を得て、今後の大会運営の参考にいたしたいと考えております。また、今大会は第1回ということもあり、日程を単日としたにもかかわらず実りある大会になったものと思っております。

大会に先立ち、暫定理事会を開催しました。続いて、開会式の冒頭で、発起人代表として川野辺会長からの挨拶と小島弘道事務局長から設立の趣旨説明があり、議事について満場一致で承認されました。その後、開催校を代表して、帝京大学学長・学校法人帝京大学理事長である沖永佳史先生よりご挨拶を頂戴し、本学会への期待が寄せられました。

記念講演では川野辺会長から「学習社会への期待」と題する講演があり、改めて学習社会のあり方を考える示唆をいただきました。シンポジウムでは、コーディネーターの佐藤一子先生の進行により、新井郁男・貝ノ瀬滋・金子照基・中留武昭会員が提案を行い、フロアとの交流により議論を深めました。課題別研究会は5つの会場に分かれて、それぞれのコーディネーターのもとで進められました。どの会場にもほぼ同数の参加者があり、それぞれ活発な議論が交わされ、課題に関する一定の研究成果を得ることができました。

懇親会では、川野辺会長の挨拶と開催校の大南英明教育学科長の挨拶の後、亀井浩明日本連合教育会会長の乾杯で始められ、参加者相互の交流が深められました。最後には、新井郁男理事の言葉をいただき、お開きとなりました。

今大会をふり返ったとき、まず感じたのは、予想以上に多くの参加者があったことです。これは学習社会を研究対象とする学会のニーズの高さの証明ではないかと思えます。既存の類似学会とのニーズの違いを実感すると共に、参加者の方々の新しい学会を創っていくとする積極的な姿勢も強く印象に残りました。

この学会設立を機に、栃木県では「とちぎ学習社会学研究会」が設立され、そのメンバーの方々に記録などの協力をいただきました。また、大会準備段階には、小島弘道事務局長、岩崎正吾事務局次長、堀越幾男理事、伊藤明彦理事、堀井啓幸理事の献身的なご助力がありました。川野辺会長には適切なアドバイスを適宜いただきました。

これらの皆様をはじめ、参加いただいた会員並びに臨時会員には心より感謝申し上げます。次第です。最後に、来年度の大会の成功を祈念して、所感とさせていただきます。

第1回大会準備委員会委員長 佐藤晴雄(帝京大学)

日本学習社会学会・第1回大会記念講演

テーマ：学習社会への期待

日本学習社会学会長：川野辺 敏（星槎大学）

日本学習社会学会第1回大会を記念して、川野辺会長の「学習社会への期待」というテーマでの記念講演が行われた。会場は会員でほぼ一杯となり、新しい学会に期待を寄せる参加者の熱気に包まれた。

講演は、まず「学習社会とは何か」という問いかけから始まった。学習社会とは、学習すること、物事を達成すること、人間になること、ここに価値をおくことを目的とする社会である。その際、学習社会を研究する当学会における研究の在り方として、次の6点が提唱された。

1. 人間であることを念頭においた研究であること。
 2. 決めつけることの危険性を自覚した研究であること。
 3. 実証的研究の大切さ（理論と実践の結合）。
 4. 複眼的・総合的視点の重視。
 5. グループ研究の重視。
 6. 会員相互の人間的交流の場としての学会。
- 当学会の研究指針を照らし出すものとして肝に銘じたい。

講演は、20世紀を経て21世紀に入った現在、何が学習社会の課題となるのかの分析へと進んだ。20世紀は、義務教育や学校教育が普及し、形としての教育が普及してきた。形としての教育は、机上の知識、学歴偏重、児童の能力の画一化をもたらした。他方、社会の変化、価値観の変化により、非社会的行動や学校教育のリタイアが増加してきた。21世紀の学習社会でめざす教育は、新井郁夫が強調しているように「To Have から To Be」をめざす方向へと動いていかなければならない。

この過程での学習は、「人間の生きる根源にせまる学習」が求められる。それは次の3つの喜びを自己のものとする学習である。

1. 絶対的個としての生きる喜び（創造の喜び、自己実現）。
2. 社会的存在としての生きる喜び（役に立つ喜び、社会的本能）。
3. 自然的存在としての生きる喜び（感動の喜び、生きる意欲）。

それでは、「学習社会における教育とは」どのようなものになるのだろうか。人間としてどう生きるかは、生かされているという根源を追求することである。ユネスコ「21世紀の教育国際委員会」は、to know（知る）、to do（成す）、to be（人間であること）、to live together（ともに生きる）という4つの視点を提起しているが、人間として生きるという価値を高めるために教育はどうあるべきだろうか、教育と学習の科学的分析が求められているといえよう。

（以上の講演概要は、森照代会員の報告を下に事務局でまとめた。）

日本学習社会学会・第1回大会シンポジウム

テーマ：21世紀の学習社会を展望する (司会 小島弘道)

提案者

- | | |
|-------------------|-------|
| ①学習社会の創造に向けて | 新井 郁男 |
| ②学校は地域社会のプラットフォーム | 貝ノ瀬 滋 |
| ③教育経営論の観点から | 中留 武昭 |
| ④生涯学習推進の観点から | 金子 照基 |

コメンテーター

佐藤 一子

「21世紀の学習社会を展望する」というテーマの下に、各分野の第一線で活躍する論客によるシンポジウムは、それぞれの観点から展望される学習社会の在り方を論じた。

シンポジウムは、まず新井郁男（放送大学埼玉学習センター）会員の「学習社会の創造に向けて」という問題提起から始まった。新井会員のこれまでの研究蓄積を背景としながら、提案される言葉の一つ一つが私たちの胸にズーンと響くものであった。学習社会（learning society）とは何か？それは、文化として学習を認めていくことであり、学んだことを生活の中で役立てていくことである。

その際、従来の「生涯学習」は改革の方向として「体系」という制度の問題により多くの関心を示してきたが、基本的に重要なのは「体系」を支える「社会」の在り方である。それでは、「learning to be」をどう捉えるか？それは、人を大切に、全体を大切にする生き方を学ぶ……お互いの役割を知り、ともに生きていくことである。「learning to know」（知る）は、「learning to do」、つまり、実践に移すことが必要であり、それは「learning to together」（ともに生きる）ことへとつながるものでなければならないが、これらの契機はすべて「learning to be」（人間としてどう生きるか）という契機と結びついている。21世紀は、この「learning to be」に基づく学習社会をどうつくっていくかが課題となる。

次に貝ノ瀬 滋（東京都三鷹市立第四小学校）会員の「学校は地域社会のプラットフォーム」というテーマに移った。自分の勤務する学校での事例として、学校を地域に開かれたコミュニティスクールとして位置づけ、その実現のための「学校ボランティア制度」が詳しく紹介された。その豊かな実践と経験に裏付けられた貝ノ瀬会員の報告は、学習社会づくりへの示唆に富む内容であった。人間関係の希薄化や他者依存などにみられるように、現在の児童、生徒は、社会性が身につけていない。このような中で、今求められるものは、「人間力の回復」として、学校と地域がお互いの持つ力を出し合って教育と地域を基盤とした新しいコミュニティ形成をする必要がある。

中留武昭（西南女学院大学）会員の提案は、「教育経営論の観点から」21世紀の学習社会を展望するものであった。中留会員の提案は、21世紀の変化の激しい社会の学校において、生涯にわたって「生きる力」をつけるためのストラテジーをどう構築していくのか、そのための考察に必要な基本的視座についてであった。「経営環境の変化と教育的エコロジ観による改善の視座」についての分析、「学習社会に繋げる学校改善の戦略」、「意味ある学習社会に必要な基礎を創るための経営上の新たな戦略3つ」における独創的な提案をどう生かすかは、今後「生きる力」をつける教育実践にとって極めて重要な意味を持つてくるように思われる。

最後に、金子照基（安田女子大学）会員の「生涯学習推進の観点から」の報告は、権利としての生涯学習をどう捉えるかという側面から、具体的に学習支援者を養成し、各地の学習センターや図書館に配置し、いつでも相談にのれる体制構築の必要性に言及したものであった。また、情報・知識・技能などの絶えざる改善システムを如何に構築するかという、生涯学習機会の充実に関する興味深い提案が行われた。

コメンテーターの佐藤一子氏（東京大学）は、「学習社会を捉える方法論」の重要性について言及した。「社会教育」が学校との対比でいえば領域概念であり、「生涯学習」は時間軸が中心となっているのに対して、「学習社会」論は複眼的・越境的、かつ学際的・総合的に学習社会を捉えていく方法論を特徴とすると述べ、極めて知的刺激に富んだ提案を行った。また、シンポジウムのテーマの性質上、ともすれば縦横に展開しがちな論議を整理し、各提案者への的確なコメントは会場にいて心地よい緊張感を覚えた。

（以上のシンポジウムの概要は、森照代会員の報告を下に事務局でまとめた。）

課 題 研 究 報 告

今大会の課題研究は5つの会場に分かれて実施され、各会場には十数名の参加者が参加し、2～3件の研究報告が行われた後に、参加者を交えた活発な議論が交わされ、実り多い成果が得られた。ここでは、栃木学習社会学研究会の会員の方による(森 照代・雪原知代・平野紀子・鈴木緩子・大出忠央の各会員)報告を基に以下紹介する。

課題研究：テーマ1「世界の地域問題と教育・文化・学習」

この会場では、関 啓子会員(一橋大学)をコーディネーターにして3名の会員から発表が行われた。まず、提案1としては、前田耕司会員(早稲田大学)から「先住民族・少数民族の観点から—アボリジニの政策決定への参画と大学開放—」と題する発表が行われた。前田会員は、政策決定のプロセスへの参画が不十分もしくは不可能な民族集団である先住民族を考察の対象として大学解放をどのように組織化していけばよいのか、アイヌ問題にも触れながら、主としてオーストラリアの取り組みを中心に述べてきた。

提案2は、森岡修一会員(大妻女子大学)から「言語の観点から」発表があった。本研究では、ペレストロイカ以降の広義のロシア(旧ソ連邦)におけるエスニック・グループの文化項目における活性化を指標とした文化的同化と多様化の具体的分析を行うことによって、「言語」を中核としたエスニック・アイデンティティの形成過程を考察したものである。

提案3は、藤田明香会員から(博士・社会学)「ノンフォーマル教育の観点から—生活世界の中でのノンフォーマル教育の考察—」と題した発表があった。本報告では、ノンフォーマル教育を、生活世界の中での多様な教育・学習の場の一つとして捉え、子どもたちの生活全体の中での役割が考察された。

最後に、コーディネーターの関啓子会員は、本日の発表では、結論を決めつけられない内容を手堅い実証性をもってアプローチし、問題提起したところに意味があるとまとめた。また、各発表においては、今までの研究とは違う焦点のあて方を評価したいとし、①では、少数民族と先住民族の問題を外国のことだけではないととらえた点、②では、ディアスポラなロシア人に焦点をあてた点、③では学校教育とノンフォーマル教育の間で選択に迷っている人達の思いに焦点をあてた点が特に重要であると指摘した。

課題研究：テーマ2「地域づくりと市民の学習」

最初に、コーディネーターの小池源吾会員(広島大学)から課題設定の趣旨の説明があり、3つの提案が行われた。提案1は、廣瀬隆人会員(宇都宮大学)により「成人教育と地域づくり」の発表があった。「まちづくり」に携わることは、『社会をよくなるようになれば、個人がよくなる。』『個人がよくなれば、社会がよくなる』というように相乗効果が期待できる。その効果を高めるものとして学習は個人と社会をつなぐはたらきをもっていると述べた。

提案2は、浅野秀重会員(金沢大学)により「住民の学びの成果を生かした行政施策の推進とまちづくり」と題する発表が行われた。浅野会員は、地域づくり、まちづくりの定義をきちんと捉えておく必要がある。地域住民が学習することの効果は、学びを通じて、地域の連帯意識の形成につながり、また、学びという視点をもったとき、地域の課題が見えてくるとした。

提案3は、藤村好美会員(広島大学)から「エコミュージアムと協同のまちづくり」と題する発表があった。同会員は、なぜ、エコミュージアムが地域づくりの視点を持つのかを問い直し、地域づくりとは住民と行政による地域経営であり、地域への参画は成人の社会体験活動であるとした。

最後に、コーディネーターから、フォーマルな場面で展開されている社会体験活動が、ノンフォーマルな教育場面で展開がなされていくことは、「まちづくり」の参加者の意識改革がなされていくことになるというまとめがあった。

課題研究：テーマ3「学校と地域社会」

堀越幾男会員(足立区教育委員会)をコーディネーターに2つの発表が行われた。

提案1は、伊藤昭彦会員（横浜清陵総合高校）の発表であった。神奈川県教育委員会で取り組んだ「地域との協働による学校づくり支援事業」について説明の後に、学校教育に力点を置きつつも、相互関係に基づいた「新たな関係」へと改善していくことによって、地域の中の「学校づくり」から始めて、「子どもたちの教育を地域全体で担う」という意識を育成し、やがては学校を拠点として地域づくりへと発展させていった成果が報告された。

提案2の玉井康之会員（北海道教育大学）からは、「聖籠中学校の取り組みー地域交流棟を中心とした学校開放の取り組み」に基づく報告があり、教育委員会の役割が大切で、特に学校を開放するための条件と責任体制を整備できるかどうかが鍵になるとした。

この部会では、コーディネーターのイニシアチブにより、一人一人の自己紹介の時間があり、和やかな雰囲気の中での進行となった。特に「開かれた学校づくりは地域づくりでもある。」「今こそ、行政である教育委員会や管理職の役割が問われている。」といったことが強調された。

課題研究：テーマ4：「キャリア開発と学習」

佐野享子会員（筑波大学）をコーディネーターとして3つの発表が行われ、3つの発表の後に、コメンテーターの藤川正幸会員（公務員ビジネス専門学校）からコメントがあった。提案1は、牧野典子会員（静岡県立大学短大部）から「看護教育の視点から」の発表が行われた。牧野氏は、看護基礎教育の現状をもとに提案を行い、看護系大学ではアンドロジョー・モデルをとるのに対して看護専門学校はカリキュラムが過密で、教師中心に学習内容を教授するペタゴジー・モデルから抜け切れないなどが報告された。

提案2は、「企業教育の視点から」、大磯恵子会員による発表があった。大磯会員はインフォメーション・ワーカーの晒されている現状を述べ、組織（企業）が目指すものを理解し、そこに自分の理想をぶつけて「個の確立」をできる人とできない人の違いを明らかにすることができれば、企業における人材育成が企業パフォーマンス管理につながることを示唆した。

提案3は、三輪健二会員（お茶の水女子大学）からの「成人教育論の視点から」である。三輪会員は、成人の特性を生かした学習と学習支援の在り方が何を意味するのかという問題意識から、自身の翻訳本や看護と企業内教育の分野での一般的投稿を取り上げながら、鋭い考察を行った。看護継続教育と企業内教育の現状を、アメリカ合衆国やカナダの動向を中心に報告しつつ、専門職としての自己教育の重要性について指摘した。

コメンテーターの藤川会員は、自立した個人の職業意識が全体のキーワードであり、現代は、自分のキャリアは自分で創る時代であると指摘した。その後質疑応答や意見交換が活発に展開された。

課題別研究：テーマ5：「学習社会支援システムの再編化と市民的公共性の創造」

篠原清昭会員（岐阜大学）と武者一弘会員（信州大学）の二人をコーディネーターとして、3人の提案による活発な議論が展開された。提案1は、「中央の社会教育改革にみる社会教育の再編」について、石井山竜平会員（静岡大学）から発表があった。石井会員の発表は、①「地域をつくる力」を現代の地域社会にたくわえる、②社会教育行政（施設・職員）をめぐる今日的課題、③生涯学習施策における「私事化」と「公共性」のジレンマ、④地方分権施策における自治体の「自立」と「広域化」のジレンマなどに関する報告から構成された。

提案2は「学習社会における人ー学習主体と法人との相剋」と題して、三上和夫会員（神戸大学）からのものであった。教育委員会改革の3つの流れを、①現状維持、②首長部局重視、③市場公開化（教育委員の公募など）として示し、公共性や公益を誰のどのような判断として定立するのが難しく、ここに問題があるという指摘がなされた。

提案3は「新国家主義政策にみる社会教育の法化」というテーマで、姉崎洋一会員（北海道大学）から報告があった。姉崎会員は、①新段階に入った「新自由主義的改革」、②2つの「新教育基本法」案の特徴、③NPM、PFI（private financial initiative）型教育改革の主要な特徴について緻密な分析を行なった。社会教育が直面している極めて厳しい環境について、再認識をせまられた次第であった。

日本学習社会学会 第1回大会総会の報告

日本学習社会学会第1回大会は、2004年9月11日(土)帝京大学八王子キャンパで盛況のうちに実施された。総会は以下の次第に則って行われ、質疑応答の後「会則及び各種規程」、「2004年度学会活動計画」及び「2004年度予算案」などが可決された。

1. 学会長挨拶
2. 大会準備委員長挨拶
3. 議長選出
4. 学会設立準備の経過について(学会設立の趣旨、学会運営の基本方針)
5. 学会役員構成について
6. 学会事務局及び機関誌編集委員会の構成について
7. 会則及び各種規程について
8. 2004年度学会活動計画について
9. 2004年度予算案について
10. 第2回大会開催校について
11. その他

総会に引き続いて、日本学習社会学会の創立の意義と今後の発展を期待するという旨の帝京大学冲永佳史学長の挨拶があった。なお、2004年度予算案が以下のように決定された。

[日本学習社会学会2004年度予算]

<収 入>

(単位:円)

勘定科目	予 算	決 算	差 異	備 考
当年度会費	1,140,000			会員150人(予定)

一般会員	1,040,000			8,000円×130人
学生会員	100,000			5,000円×20人
過年度会費	0			

一般会員	0			
学生会員	0			
機関誌等売上	0			
その他(謝・租等)	0			
前年度繰越金	0			
収入総計	1,140,000			

<支 出>

(単位:円)

勘定科目	予 算	決 算	差 異	備 考
大会費	200,000			アルバイト代等
運営費・会場費				印刷・製本代150部
大会資料費等				
機関誌等	50,000			

印刷費	0			
送料	0			
編集費	50,000			
事務局運営費	400,000			

印刷用紙費等	50,000			勤務1200人/大会プロ
送料	200,000			ラム300人/学会ニュー
事務費	150,000			ス/アルバイト代/事務局
				会議費等
予備費	490,000			
支出総計	1,140,000			

日本学習社会学会 第2回大会開催のご案内

日本学習社会学会第2回大会は、宇都宮大学にて開催する運びとなりました。詳細は追って連絡しますが、現在、以下のようなことを企画しています。

1. 開催地・会場

宇都宮大学 大学会館

住所：〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町 350

TEL：028-649-5116

2. 日程と内容

期日 \ 時間	9:30	10:30	12:00	13:00	17:00	19:00
9月10日 (土)		理事会	昼 受付	自由研究	総 会	懇親会
9月11日 (日)	課題別研究会 (テーマ1～5)		食	シンポジウム ワークショップ		

3. 課題別研究

- テーマ1：世界の地域問題と教育・文化・学習
- テーマ2：地域づくりと市民の学習
- テーマ3：学校と地域社会
- テーマ4：キャリア開発と学習
- テーマ5：学習支援システムの再編化と市民的公共性の創造

4. シンポジウム・ワークショップ (会員以外にも公開する)

- ・シンポジウムとグループ討議を織り交ぜて進める参加型のシンポジウムとする。
- ・提言ごとにグループ討議をしながら進める。

5. 運営事務局体制

- 教育学部：遠藤忠、宮崎州弘、藤井佐知子
- 生涯学習研究センター：廣瀬降人 (事務担当)
- とちぎ学習社会研究会会員：院生・修了生など

6. 懇親会 (17:30～19:00の予定)

会費 4000 円を予定

7. 宿泊の手配

宿泊を希望される会員には斡旋する予定。まとまれば、近隣の温泉も可能です。